

木材は、小丸川の流れを利用して川上より流し、川下で引き上げて集積した。木炭は山とこで生産されたものを馬車に積み、一人で馬三頭も引いて運搬し、その賃金で生活するものもいた。鳴野は当時（明治三十年頃）戸数四十戸位で人の数は二百八十名余りだったが、各家々に馬を二頭か三頭飼っていたようだ。

千石船十隻、漁船七隻余りいたので運送業・漁業が主業で、農業は副業だった。水神様の神木は樹齡千年くらいの松の大木があった。水神様の川向こうの広い陸地では千石船が建造され、船の進水式は大変にぎやかで村中の人々がお祝いをした。尚、台風シーズンになると、水神様下の川には千石船が五隻、七隻もつながれていた。

その後、大正十年に日豊線が開通するようになって、小丸川に鉄橋がかかり船の出入りが悪くなり、川上にのぼれなくなった。それで船の数もだんだんと減り、千石船によって生業を営んでいた者は農業へと転向していったのである。

馬ん糞橋の化けもの

高鍋郷土教育資料集より

今からおよそ百年も昔のことです。中鶴に増太郎という大変ものをこわがる人がいました。

ある日のこと、用事で町に出かけましたが、用がおそくなり夕暮れになったので、大声を張り上げ歌をうったり、咳ばらいをするなどしながら急ぎ足で馬ん糞橋の所まできました。その頃、この橋の付近は立木がおい茂り、やぶばかりで昼でも気持ちのよい所ではなかったのです。まして夕方などは人通りも絶え、それはそれは寂しい所で、やぶがガサツとでもいうものなら、そら出たーッと逃げ出しそうなところでした。

そんな所を通るのですから、増太郎は声を一段と張りあげてこわごと足を速めて歩いていました。その時です。目の前に真黒な棒の様なものがニューッと出てきたのです。増太郎は気が動転するばかりに驚きました。それで突差に腰にさしていた脇差しを抜くよりはやく、化けものめがけて切りつけたのです。とその時

「おい、まてまて、増太郎、何をするのだ」

と、持っていた棒をひくと同時に出てきたのは、これも中鶴の人で、峽吉という若者です。ちょうどそのころ田んぼの水守をしていた所、増太郎が通りかかったのだのでおどしてやろうと、峽吉が鍬の柄を差し出したのでした。

しかし、怖がり屋の増太郎は本気にしません。そして「やあー、うまく化けやがったなー。峽吉に化けたって？　だまされるもんかー」

といいながら、尚も必死になって切りかかっていくのです。峽吉は懸命に逃げながら

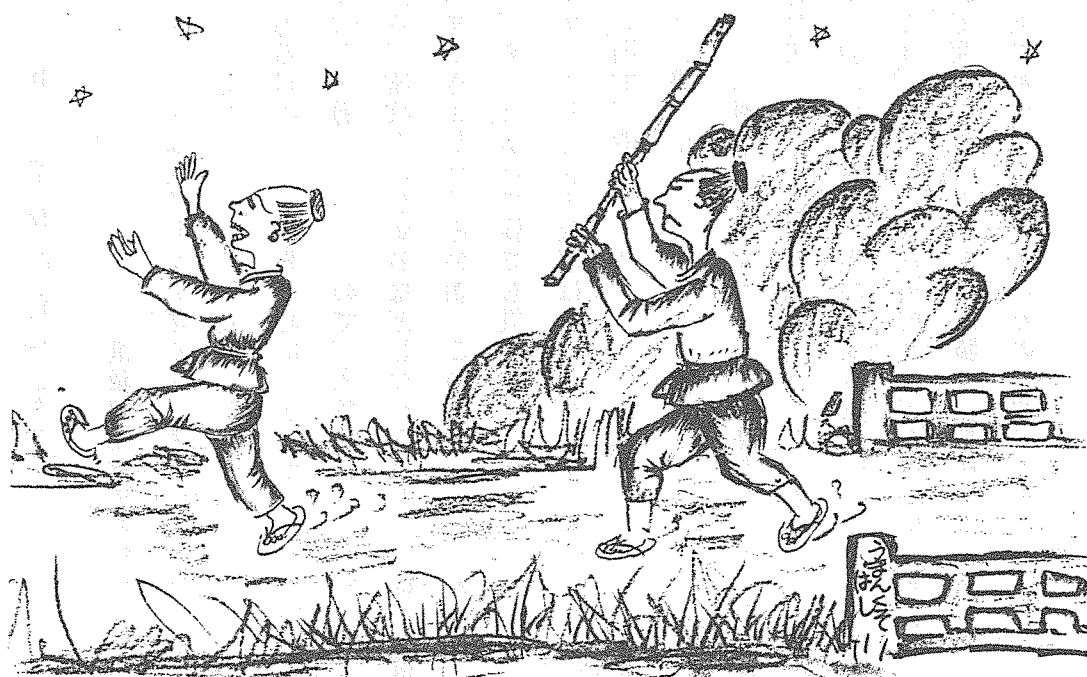
「許してくれー。おれが悪かった、助けてくれー、助けてくれー」

と、顔色を真青にして逃げまわります。増太郎は

「悪いならなぜ化けあがった。おのれ逃がしてなるものか、この化けものめが」

と、飛びかかっていくのです。

そのうちに峽吉は、やっとのことでその場から逃れ、我家に帰ったということです。



不思議な不思議な話

高鍋郷土資料集より

今からおよそ百年程前の話です。

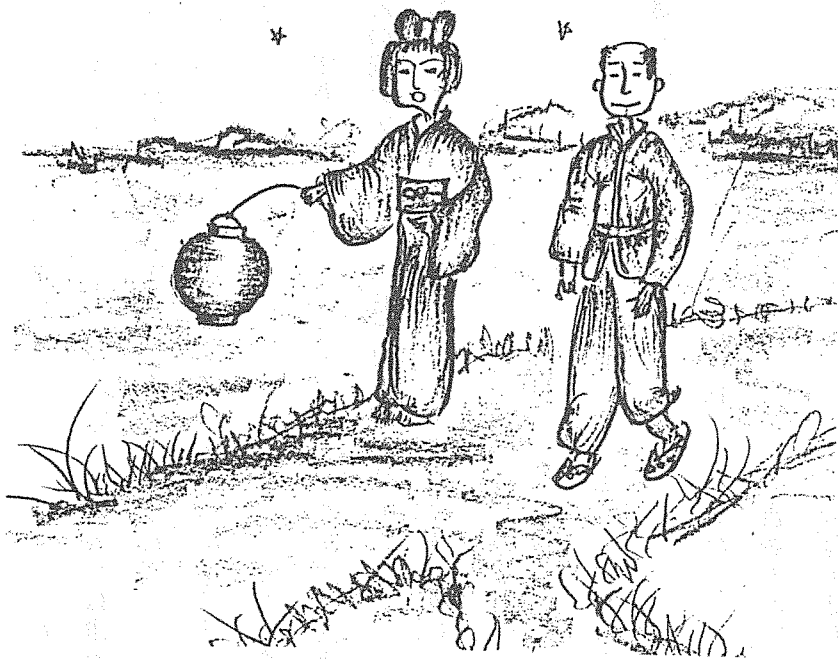
水谷原に山下末吉さんという若者が住んでいました。ある年の秋の日のこととす。日置に芝居見物にいつて、夜十一時頃に芝居がはねていよいよ帰途につきました。しばらく歩いて行くうちに、何か後ろの方から声がするのです。末吉さんが耳をすましてみると、

「末吉さーん、末吉さーん」

と、自分を呼ぶ女の声がするのです。

末吉さんは、はてな？ 誰だろうと思ひながら立ち止まって待っていますと、間もなく追いついた女は、うるし山の「オステ」という女で、かねてより心安くしている人で手には提灯を持っていました。末吉さんは、

✕



「ああ、オステさんだったのか」と、呼びかけ、

「これは連れができてよかった。分れ道のところまで一緒にいこう」

と話しあつて、今日の芝居のことなどを話しながら道を急ぎました。

ところが、いけどもいけども、なかなか分れ道の所にはこないのです。末吉さんは変だなあと思つて、

「オステさん、まあ、お待ちなさい。どうもおかしいよ。ここで一寸煙草でも一ぷくしてみよう」

といいながら、腰に

さしていた煙草入れを出して

「ちょっと火をかしなさい」

といって、オステさんが下げている提灯のそばによると、提灯の火がぱっと消えてしまったのです。末吉さんは、

「ええ、しかたがない。そろそろいきましよう」

といいますと、オステさんは黙って先に立って急ぐのです。しばらく歩いて末吉さんがオステさんの前の方を見ますと、どうも提灯の火がついている様なのです。それで末吉さんはまた、

「煙草をもう、どれ火をかしてくれ」

といいながら提灯のそばによっていきますと、またもや提灯の火はスーッと消えたのです。末吉さんは

「ええいつ、仕方がない。行きましよう」

といいますと、提灯の火はぱっかりついて先に進むのです。それからしばらくして

「ああつかれたよ、このあたりでしばらく休んでいこう」
と、末吉さんは道端の草むらに腰をおろしました。オステさんは黙ったままそのそばに提灯をぶらさげて立っ

ています。末吉さんはまた

「煙草でも一ぶくしよう、どれ火をかしなさい」

と、そばによりますと火は消えるのです。

末吉さんはふてくされて、

「火が消えては仕方がない。ぼつぼつ行こうか」

といって歩きはじめました。やがてやっと分れ道の所にたどりつきましたので、オステさんに別れを告げて、

一人ぼつぼつ帰りました。

やっとのことで家に帰り着いた末吉さんは、戸を開けるなり、

「いまだったよ。ああ、つかれた、疲れた」

と、土間に立ちました。母はこれを見て手拭を渡しな

がら、

「ほこりを払って上げれよ」

といいました。末吉さんはなんとなくぼんやりとしながら、その手拭でぱたぱたとほこりを払って上にあがりましたが、なんとなくぼんやりとしています。母はそれを見て

「蕎麦切りがでけちよるが食べんか」

と言いましたが、末吉さんは

「いや、今は食べてこたね。それよりか寝せちもらおか」といいながら、床に入るとすぐにぐっすり寝こんでしまいました。

一晩すぎて次の朝明るくなった頃、草刈りにきた村の若者にゆり動かされて目が覚めました。自分の家に寝ているばかりと思っていた末吉さんは、きょんととしていましたが、ようやく正気にもどったと見えて、しきりにあたりを見回してよくみますと、どうしたというのでしょうか。自分が寝ていたのは杉谷（地名）の上の方の草原だったのです。妙なこともあると思って腰の手拭をとって顔を拭こうとしますと、その手拭はいつのまにかきれいな日の丸が浮き出ているのです。末吉さんは急いで自分の家に帰り、母や妻に昨夜からの出来事をこまごまとはなしますと、二人とも大変に不思議がり、首をかしげればかりでした。

《その後のこと》

＊末吉さんが帰ったというその晩は、確かに蕎麦切り

が出来ていたということです。又、オステさんに会った折、その夜のことを話したら彼女は全然知らないといったそう。これを聞いた村人達は皆、狐から化かされたんだと言ったそう。不思議な不思議な話です。



元高鍋のシンボル二本松の話

馬場原 後藤ミドリ 六十八歳



私が生まれて初めてこの眼でみた二本松は、すでに何百年か、いや千年以上もたっているかも知れない程の大木でした。雲雀山に登る坂道を上り切った地点から東へ百米位の所に大人が三人程でかこめる程の大きさを、大きな枝を四方にさしのべてい

ました。

その雄大な姿は高い台地の上に聳えており、誰の眼にもすぐに目に止まり、あれが二本松だというと、町外の人々も目を見張る程有名な夫婦松でした。

私の家はこの二本松のすぐ近くに畑があり、畑仕事にいった時などは家族そろって、この夫婦松の木陰を求めて昼時を過ごす時が度々ありました。広くひろがった松の枝の下は涼しい風が吹き抜けていて、包みを開いてご飯をたべるのは、子どもの私にとってはすごく楽しいものでした。

又、二本松は小学校の林間学校の間でもありました。ある時のことでした。林間学校にきていた男子生徒が何かで、一本の松の木をとりかこみ、両手を広げて何人でまわせるかとワイワイ騒いでいたのです。ところが、丁度根元から三十糎位のところに長い大きな釘が何本も打ち付けてあり、それに一人の男の子のズボンがひっかかり、大騒ぎになったのです。あれこれと話を聞けば、その釘は呪い釘だということです。子どもたちはびっくりしてしまいました。

呪い釘は二十一日間祈りをこめて打ち続けなければならぬそうで、その上人目についてはならないのだそうです。ところがその人は十三日目に見付かってしまったので、満願を果たすことが出来なくて亡くなられたそうです。その頃人の話では、嫁いだ家で胸の病氣にかかり、一方的に実家へ帰されたことを恨んで呪い釘を打ちはじめたということですが、「人を呪えば穴二つ」ということがあります。本当にその通りだとおもいます。

呪い釘の話聞いて、私もすぐに見にいきましたが、頭のない四角い五寸釘が、一か所に十三本も打っており、初めて見た呪い釘に一瞬「ドキッ」とし、身がすくむような思いがしたことを覚えています。

それから何年かの後、昭和二十年終戦直後の九月、すさまじい台風のために地上から四米位の所でポッキリと折れ、たくましく美しい夫婦松はこの世から姿を消してしまいました。

私はあの雄大な二本松が今でも残っておればと思い、あの台風が恨めしくなりませんが、在りし日のあのすばらしい二本松の姿を忘れる事はできません。



昨年（一九八六年）七月でした。弟たちと名所旧跡巡りをしたおり、二本松のたっていた所へもいってみましたが、現在は雑草に埋もれて跡形もなく、本当にさみしい思いを残して立ち去ることでした。

あれ程有名で、高鍋のシンボルとでも思われていた二本松です。何かの標示でもあればと思うことです。

高鍋藩きつての大力男

牛牧 坂本 幸恵 八十三歳

秋月の殿様の家来に、秋月衆といって草履取りをしておられた方がおられました。衆さんはとてもひょうきんで面白い方でしたので、みんなから衆どんという愛称をつけられ、大変親しまれていました。ところが、衆どんは人並みはずれた力持ちで、みんなから怖がられていたところもありました。

ある日のこと、殿様のお供で御殿に行かれた時のことです。草履取りだった衆どんは、殿様が上にあがられると、草履が無くなつてはと玄関の屋根を支える大きな柱を抱きかかえて持ち上げ、その柱の下へ草履をひよいとおいたというのです。これを見ていたまわりの家来は、屋根がミリミリ、ワリワリと音を立てるのにびっくりしました。まわりの者が心配して「そんな無茶なことをしては、家が壊れるからいけない」といいましたが、衆どんは一向に気にもとめず笑っていました。

これを聞かれた殿様は早速、衆どんを呼んで注意をさ

れました。ところが糸どんは、殿様の言われることだけに決して逆うことなく素直に聞くのです。

何代目の殿様かはわかりませんが、その

殿様のお供をして江戸にいかれたことがありました。ところがその殿様は、諸国の大名の方々と御殿へ上げられた折、いつも他の殿様方が忙しく働いておられても、「雑事など俺はせん」といって、いつも部屋柱にもたれながら他の大名達が働いておられるのを、見てお出でし



た。こんな秋月の殿様の様子を見て、他の大名達は心穏やかでなく、いつか機会があったらやつつけてやろうと思っていました。ところが、大力の糸どんはいつも御殿のすぐそばで秋月の殿様をじっと見守っているのです。それで大名達は糸どんを見ると、

「今日はいかん、糸が来ちよる。あれが暴れると始末たうたん」

と、手出しが出来なかったと言うのです。

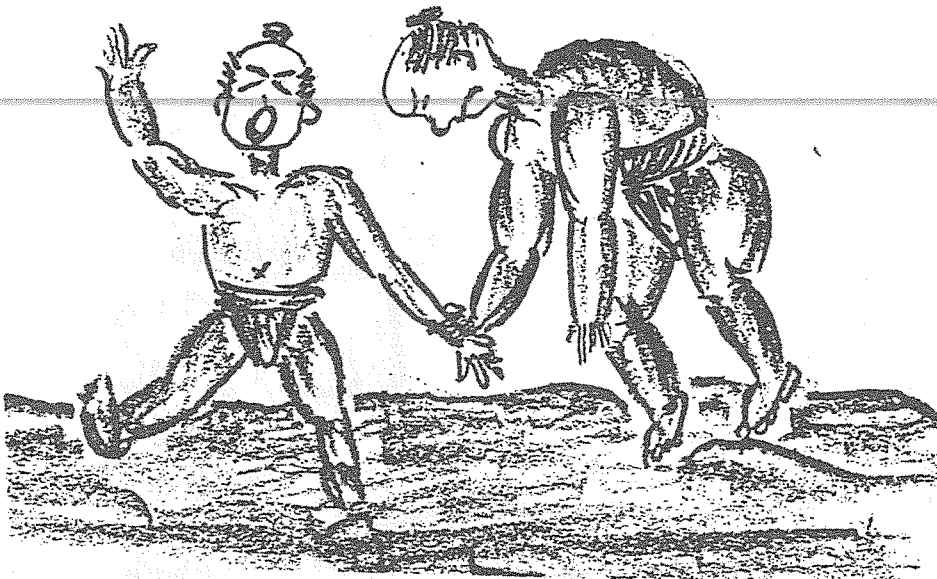
また、糸どんは加賀の殿様と大変仲がよかったのです。加賀の殿様は糸どんを見られると、「糸どん、来たの」といつも声をかけられるし、よく可愛がっておられました。糸どんもよく慕って、世話もしていたのです。ですから殊更他の大名は秋月の殿様には何とも言えなかったということです。

いつかこんなこともありました。各藩の力自慢が集まって相撲大会があった時です。糸どんも出ましたが、いきなり地面に手について相手に取り組んで行こうとする、行事が

「糸どんは相手より早く手をついたから、お前の負けじ

や」

と、いったのです。糸どんは腹の虫がおさまりません。



しかしその場はぐっとこらえていました。そして次の相撲大会のときです。睨み合っていた両者が立ち上がるなり、糸どんはいきなり相手の手首を掴み、しやにむに土俵の中の地面にその手

を突っ込んでしまいました。ところがその深さは一尺程（三十糎）もあつたのです。そんな様子を見ていた者一同は、糸どんの怪力に全くあきれ果てたということです。

糸どんはその後、高鍋に帰りましたが、余りにも馬鹿力を出し自慢したので殿様の御機嫌をそねてしまい、とうとう閉門を申し付けられ川南の市納に籠もりましたが、ここでも糸どんの怪力は村人達を驚かせました。

ある日のこと、村人達は糸どんが退屈そうにしているので、川に魚捕りにさそいましたが、家は外から嚴重に鍵がしてありますので鍵を開けねばられません。鍵取りに行こうとすると糸どんは押し止どめて、突然、家のかもいのところを抱え上げ、下をすかしてそこから出てきました。皆はおったまげましたが、糸どんはそしらぬ顔で、さあゆこうと歩きはじめたのです。

白髭の川は川幅が四、五米もあります。夫々に網でとりはじめましたがなかなかうまくとれません。ところが、糸どんはなにを思ったか、戸板を二枚借りてきて両手で一枚ずつ持つと、それで川をせき止めたのです。川の水は殆ど止まり、外の者はそのうちに魚を沢山とりました。

帰ってくると又も家を持ち上げて、家の中にひよいとはいつていったのです。

こんな有様で、人々は事ある毎に衆どんの怪力に舌をまいていましたが、衆どんも寿命には勝てません。遂に市納で亡くなってしまいました。

村人達ちは、衆どんを哀れに思い、小さな祠を建てて「藪神さん」としてお祀りしましたが、その怪力にあやかろうと、お参りする人々が絶えなかったといひます。

私の母は川南の市納でしたが、幼い頃はよくお参りしたと聞いています。

虚無僧の墓

鳴野 森 仲吉 八十三歳

川南町通山の海岸に虚無僧の墓（塚）があります。地域の人々はその墓を大変敬ってお参りされています。

お参りするといろいろとご利やくがあつて、お参りする人々が沢山ありました。その虚無僧の墓の由来についてお話しします。

昔、高鍋藩に森新助という方がおられました。真剣で立ち会えば彼の右に出る者はなく、藩中随一の剣豪でしたが、別の名を「人きり新助」とも呼ばれていました。そのことは藩の密令で、藩に潜入する隠密や罪人、あるいは脱藩者など全て闇から闇へと葬ったのです。しかしそれは藩命とはいひながら、人々の憎しみをかう異名でもあつたのです。

丁度その頃ある日のこと、武者修行と名乗る虚無僧が新助の家の門前に立ち寄り、新助にたのみました。

「貴方ほどの豪の者より一手お教えお願いつかまつらば旅のつれづれに話の種ともなり申す。是非一手ご教授ね



がいたい」

と、申されるのです。そういわれて新助が虚無僧を見ますと、どうしたことか虚無僧の五体になんとなく殺気が漲っているのです。新助は腕が立つほどにそんな様子

に内心ぞっとしたのでした。

そこで新助はこういいました。

「我々は日頃殿様より他流試合を固く禁じられています。誠に濟まないが、今日のところはお帰り下さい」

といって、いくらかの喜捨をやりました。すると虚無僧は天蓋のへりに左手をかけ、錢を貰うと新助の門前から立ち去っていきました。

ところがどうしたことか、来る日も来る日も尺八の音が新助の門前より聞こえて来るのです。

こうなれば新助には世間体もあるし、争いは避けなければと考えていましたが、覚悟を決めないわけにはまいりません。真剣となれば五分五分だと思い、新助は大きく息をつくと虚無僧に向かっていいました。

「仕方がない。貴殿がそんなに望まれるなら、真剣であるならば試合をすることにいたそう」

と、一発かましたのですが、虚無僧はにんまりと笑いながらいいました。

「心得申した。それがしは尺八にて立ち会いたす」といいました。

さて、試合の場所を浜辺に選び剣を交えましたが、激闘することすでに数時間に及んでいます。この虚無僧は新助の切り込む鋭い太刀先を尺八の先端の節でかくくあしらい、その姿はまるでつばめのように身軽い身のこなしました。

そればかりか、受け流す尺八は度々新助の肩先深く食い込んでくるのでした。

新助は必死になって戦いましたが、遂に疲れ果ててしまい砂浜にへたばってしまいました。次にふりおろす尺八は新助の頭蓋骨を打ち砕くばかりでした。

ところがここに伏兵がいました。新助の妻です。夫の身を安じて早くから気をもみ見つけていたのです。この妻は「霧の術」という術を会得していました。どんな方法かという、卵の中身を抜き取り、塩を加えた「はぜの木」の灰をつめて、いざという時投げ付けるのです。新助の妻は出かける折にこの武器をふところへ密かに忍ばせていたのです。夫の危険を見た妻は、これは一大事と早速ふところからその卵を取り出して投げはじめました。

目にも止まらぬ早業で卵は疾風のように虚無僧の顔に次から次へと飛び散ります。予期せぬ不意の攻撃に身をかわす暇もなく虚無僧は灰だらけとなってしまいました。新助の妻はこれを見てすかさず、

「婿殿、今じゃ両足を切り払われよ」

と、はげしました。

新助は妻のその言葉を聞いて勇氣百倍、満身の力をふりしぼりながら真一文字に切り払ったところ、虚無僧は防ぐこともできず、その場にどうと倒れました。すかさず飛び付き馬乗りになると太刀を逆手に止どめをさそうとしました。その時、虚無僧は新助の腕をつかみ、

「武士の情け、止どめだけは許されよ、己の身は己で始末する」

といいながら、首を左右にふって逃れようとするが、新助は容赦なく突いてかかるのです。白刃は遂に喉元にきらめいた。虚無僧は最早これまでと、かすかな声をふりしぼって、

「よくよく聞け新助、それがしに止めを刺せば七代までも崇ってやるぞ」



と、悲痛な叫びをあげるのです。

新助は、

「崇るなら崇って見よ」

というなり、喉元をぐさりと刺しました。あわれ虚無僧の最後でした。

その新助の子孫に病になる者が続いた。そこで、後世の士族森藤造が虚無僧の埋葬してある塚に墓石を建て、ねんごろに魂を慰めお祀りしたのでした。合掌。

宮田川にいた

「ひょうすんぼ」の話

蚊口 日高勝次郎 七十七歳

昔、私の家は蚊口の街中を流れる宮田川べりに建てられていました。家の前には松の老木が二、三本たっていて、川の上までのびていました。障子を開けると四、五米先の庭先で、手を伸ばすと届きそうな近さです。細い道が通っていたのですが我家の庭同然でしたし、松の木



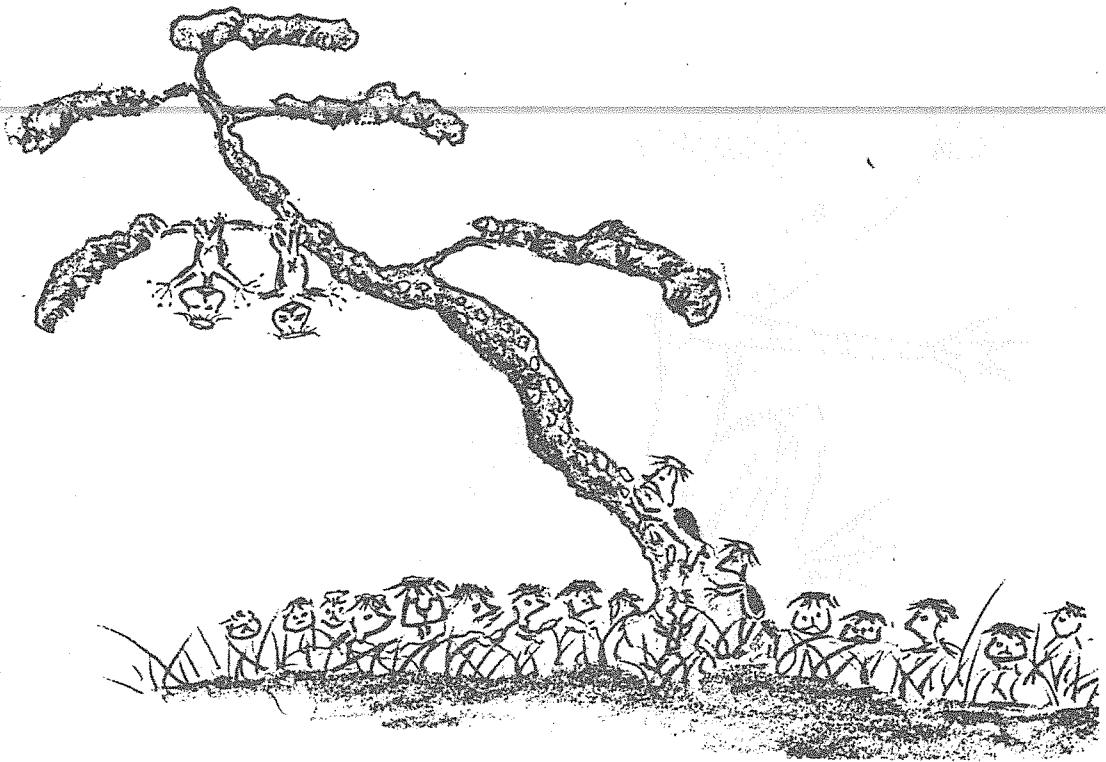
の枝ぶりは浜風に吹かれて実に格好よく、自然の美しさ

は誠に素晴らしい風景でした。その上、部屋から眺める川の water は清く澄み、時折小魚どもが水面を飛び跳ねて、水しぶきを上げるのを見ると身も心もなごんでくるのでした。

ところが只一つ驚いたことがあったのです。というのが、毎晩、真夜中頃になると決まってザワ、ザワ、ザワ、ザワ、キー、キー、ザワ、ザワと何者かが騒いでとても眠れないのです。しかもその正体はどうしてもわからないのです。家の者達は、それは確か「ひょうすんぼ」だということです。また近所の者達も「それは、ひょうすんぼに違いない。どうにかして捕えられないものか」と皆で頭をひねりましたが、よい方法がないのです。

そんなある日の晩のことでした。その晩は丁度新月で、細い月灯りが川面をぼんやりと照らし、正体を見届けるには格好の月明りです。

部屋の中に横になって待ち構えていますと、真夜中頃遠くの方から何やら水をかきわけながら、こちらにやってくる音が聞こえはじめました。ザワザワ、ザワザワ……と、何者かわからないが大変な数のようです。私は



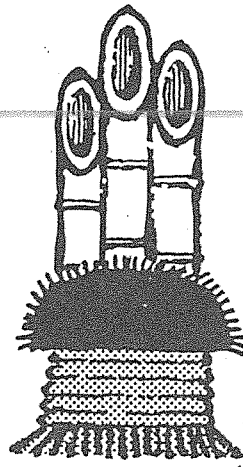
なおも息をこらし耳をそばだてていますと、家の前まで来たようです。と思う間もなく、今度はガサ、ガサ、ガサ、ガサ……という音が聞こえはじめました。ハテナ？ 確かに家のそばの松の木に登っているようです。

私はたまらなくなって、障子をそっと、そっと僅かばかり開けて見ようとして障子に手をかけ、引こうとしたその時です。突然、バシヤ、バシヤ、バシヤッと烈しい水音がしたのです。私はサッと障子を引きながら川の方を見ましたが、その正体を見届けることは全く難しいことでした。しかし、少し遅れて飛び込んだらしい生き物の姿がチラリと見えたのです。その姿は子どもものころから聞いていた“ひょうすんぼ”にそっくりで、「ああ、やつぱりそうだったのか」と思ったのですが、あつという間の出来事で、その正体をはっきり見届けることが出来ず残念でなりません。

こんな事があってから、この生き物は自分の姿を現わすことはありませんでしたが、これを聞いた付近の人々は“ひょうすんぼ”に違いないと、もっぱらの評判でした。

昔の正月行事

宮田 奥村ヤエ子



私どもが幼い頃、
お正月といえは年
中行事の中では最
も楽しい行事の一
つでした。

歌にもあるように「もういくつ寝るとお正月……」と、
指折り数えながら待ったものでした。というのが、一つ
年が増える（昔は正月がくるごとに年齢が一つ増える数
え方をした）ということ、とても誇りに思っていました。
と申しますのが、一つ年が増えたというので両親か
ら頼りにされ、また自分も自覚がたかまって、それまで
よりも更に一生懸命努力したものです。それで褒められ
るとますます頑張ったものでした。

正月の遊びも楽しいものでした。男の子は「こま回し」
（こまは殆ど自分で作った）とか「たこあげ」（たこも自
分で作った）「ねんぼううち」（木の棒の先をとがらし、地

面に投げて立てると共に相手の棒を倒す遊び）「パッチ
ン」等で騒ぎましたし、女の子は「羽根つき」「まりつき」
「あやとり」「かるたとり」等大変楽しい日々でした。

又、正月のご馳走も楽しみの一つでした。ふだん食べ
ることの出来ない珍しいものが食膳に並べられるからで
す。

私たちが幼い頃（大正時代から昭和の初めにかけて）
に経験した正月行事を次のようにまとめてみました。

元日・二日・三日

家族揃ったところで「あけましておめでとうござ
います」のお祝いの挨拶が終わると「おせち料理」
をいただきます。お雑煮と数の子は必ずあって雑煮
は沢山食べましたし、数の子はいっぱいありました。
思いきり食べた後は、近所の子どもが寄ってみんな
で遊び回りました。

七日

七草雑炊……七草がゆともいいましたが、これを
食べると「はやり病」に罹らないと、聞かされてい
ました。

七草……せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほ

とけのざ・すずな・すずしろ

十日

百姓の正月といって、朝早くまだ小鳥が鳴かないうちに田んぼに行き、明穂（あきほ）を向いて一畝打ってお米と塩をお供えます。それが終わると家に帰って雑煮を頂き、お正月みたいに休んで楽しめます。

十一日

鏡開きの日。お供えていた飾り餅をおろしてきて「ぜんざい」を作って頂きます。

「しめ縄」等は粗末にならないように焼きました。

十四日

若年といってお餅をついて食べます。

夜は子どもが中心になって「もぐら打ち」をしました。「もぐら打ち」は青竹の先に稲藁を太く巻いたもので、各家々を「もぐら打て小打て、隣のせっちんもつくりかやせ」等とおらびながら回りました。叩いて回った家では子どもたちに、餅とか半紙を下

さったようです。

その半紙で習字をする上達するんだよ、と聞かされていました。

十五日

柳の木で箸を作って小豆のご飯を頂きました。

二十日

二十日正

月でチャン

粉になって、

正月は終わりです。

「チャン粉」

というのは、

麦を炒って

粉にしたも



のと、カライモのきり干し粉を混ぜて作った食べ物ですが、粉ですから食べる時油断すると風に飛ばされたり、こぼしたりしますので、竹の皮をさじのかわりにしていただくしました。こぼすと「のみ」がわくといって、やかましくも言われました。

不思議な石ころ

正祐寺 甲山 勝代 八十二歳

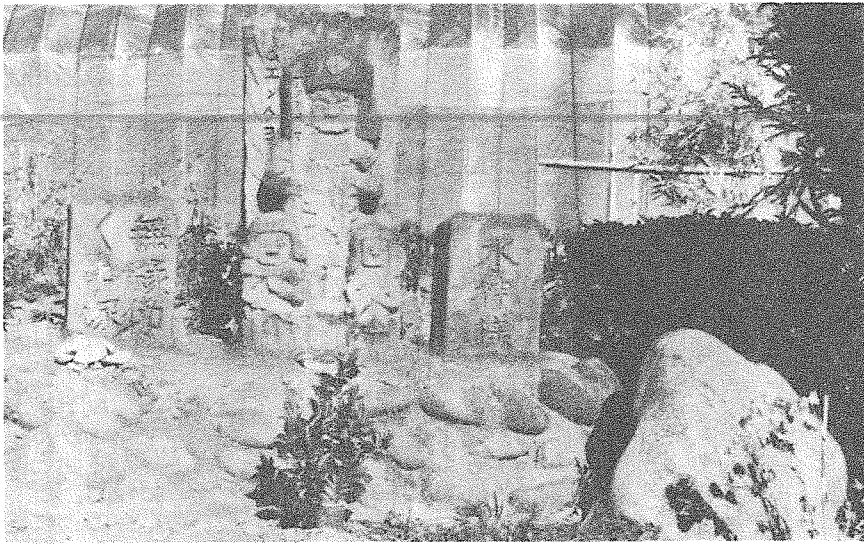
正祐寺はお染ヶ丘台地に上る途中の、傾斜地一帯の山地に点在しています。

正祐寺には昔、二か所のお寺がありましたが、その一つは大寺（オデラ）で海岸に近いところで、大寺の住職の墓石が山の中に沢山建立されていて、昔の面影を残しています。

もう一つは、正祐寺公民館のある地域に寺がありました。この付近にも墓石が山の中に散在しています。お染ヶ丘台地は昔、山が多く、川南町・都農町へと広い台地（現在耕地）になっています。この台地には無数の「塚」が散在していますが、持田古墳の一部になっています。

鳴野平地より、お染ヶ丘台地に上る坂には、深川坂、大寺坂、鳴野坂、正祐寺坂、蛸ノ口坂がありました。その中で正祐寺坂は中央にあって、人通りが最も多かったのです。そして、その坂の途中には大きい石が祀ってありました。昔の人々はその石ころの前を通る時は、草

履を脱いで両手をつき、拝んでから坂を上っていったということが伝えられています。



大正時代の頃の出来事ですが、その石ころを誰かが移

動したことがありました。
ところが、移動した近くに家があって、丁度家の入り口の所だったので、家の人は邪魔になると思いながら、何時も通っていました。
それから暫くたった頃、その家に病人ができました。

色々と手当をしましたが、なかなか治らないのです。そこで思案のあげく、祈禱師のところへ行って、訳を話しながらどうしたものかと頼みました。

祈禱師は神様を拝み、暫く考えていましたが、その家の人に言いました。

「貴方の家の入り口に大きな石があるだろう、それがさわっている。それで、その石ころを元のところへ安置して、お祀りするがよい」

と教えてくれました。

その人は早速、元の場所に運んで安置して丁寧にお祀りをし、更に岩岡保吉さんに「石の仏像」を彫ってもらって、石の傍らに建立して霊を慰めました。すると、病人はだんだん良くなって元の元気な体になりました。

その石ころは現在も坂の所に安置しており、石ころの傍らに石仏像が建立されています。